
銀木犀を君に... ~ 銀時、結婚式の夜 ~

草紙屋本舗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀木犀を君に……銀時、結婚式の夜

【Nコード】

N2420M

【作者名】

草紙屋本舗

【あらすじ】

銀魂、銀時の嵐のような結婚式ストーリー、金木犀の誓いのプチ続編。結婚式の夜のふたりの様子を綴ってみました。プチなお話なので、ほぼ銀さんのモノローグのようなストーリーですが、ご覧くださいませ

目の前に江戸市内の夜景が広がっている。

脇の方に一際明るく見えるのがおそらくカブキ町だろう。空にチカチカと光っているのは夜間飛行中の飛行機のストロボライトだろうか。

「…おつかれさん」

「銀時さまも…」

ふたりはどちらともなく、ふつと笑いながら短く言葉を交わした。今日、昼すぎから遅れて始まった結婚式はなんとか無事に終わり、その後志村家を会場に執り行われた披露宴もついさきほどお開きとなった。

実は、お登勢や、お妙、あやめにたま、新八に神楽…参列者みんなで新郎新婦のために今夜の宿を用意してくれたのだ。場所は、神田明神からほど近い老舗のホテル。そしてここは、なんとスイートルーム。新八からは今夜の宿は用意してあるから、とは聞いていたが、まさかこんな贅沢なところとはねエと、内心今も銀時は驚いている。と、同時に心からみなの心遣いに感謝のキモチでいっぱいでもある。

…せめて、今夜くらいはいい夢を見てもらいてエしな。

彼女はと見れば、バスルームをのぞいてその贅沢なつくりに歓声をあげたり、クローゼットルームの広さにさらに驚いたりとちよこまか楽しそうにしている。

「…こつちイ、来なよ」

銀時が声をかけると、はにかんだような表情で銀時のそばに寄ってくる。そのまま彼女をぐっとだきしめると、肩に頭をもたせるようにしながら銀時はため息をついた。

「やつとふたりつきりになれた…」

「銀時さま…」

「…そろそろその呼び方もやめない？」

「え？」

「だって、俺たち結婚したンだし、夫婦になったンだし…ほかの呼び方あるんじゃない？」

「…でも銀時さまは、銀時さまですよ？」

「…たとえばア、だんなさま、とかア、おまえさま、とかア…」

「…だ、だ、だんなさま…」

顔を真っ赤にしながら彼女が銀時によびかける。

「ほんとに俺の奥さんになったんだ…」

「そ、そうですね！だ、だんなさま！」

「んーなんかその言い方、やっぱメイドっぽくてなんか違うかもオ。やっぱア、いつものでいつかア？」

「もう！どっちなんですか！銀時さまは銀時さまですからねっ！私、そうしか呼べませんから！」

ちよつとふくれながら彼女が言う。そんな怒った顔もやっぱり可愛くて、銀時は彼女の唇にそつと唇を寄せる。キスの合間に時々もれる彼女のため息が、たまらなく銀時を刺激する。背中にまわした腕をさらにきつく彼女の体に巻きつけるようにだきしめて彼女の耳にささやく。

「もう離しやしねエ…おまえをずっと護っていくから」

「銀時さま…」

彼女の胸に顔を埋めるように、そしてよりお互いの体が隙間なく密着させるかのように、左手は彼女の頭を抱き、右手は彼女の腰を

引き寄せ、銀時はさらに彼女にキスを強く繰り返す…

その時、ドアを遠慮がちにノックする音が聞こえた。

…コン、コン。

「…結婚式の夜の新婚夫婦を訪問するってエ、まじですかア…？」

彼女の体を腕の中に抱きながら、舌打ちをする銀時。両腕を銀時の肩にそつとまわしながら彼女が頬を赤らめながら言う。

「私、行つてきましようか？」

「…いいや、俺が行つてくるわ。ちょい、ここで待つてて」

彼女をそつとベッドにおろし、胸元を直すように着物を調べると、銀時はドアの前まで行き、声をかける。

「…どちらさん？」

「…お花を届けにまいりました」

「頼んだ覚えはないんだけどオ？結婚祝的なやつウ？」

「…奥様からご主人様への贈り物となっておりますが…」

…おいおい、なになに？それ？

一応、用心しつつも銀時はロックを外し、ドアを開ける。

「…ウおッ！つ驚いたア！」

銀色のリボンをかけた小さな鉢植を手にも、目の前に立っていたのは万事屋の近くで花屋を営む茶吉尼族の屁怒組だった。

「いったいぜんたい、どうしたア？」

「…せつかくおふたりでくつろいでおられるところ、申し訳ありませんね。」

実は奥様からじきじきにご注文いただいていたものですから…」
「それかい？」

「そうです。銀木犀の鉢植です」

「銀木犀？金木犀じゃなくて？」

「はい、銀木犀です。」

なんでも奥様が思い入れがあるのは金木犀なんだそうですが、もともと金木犀というのは、この銀木犀が変化してできた種類なんですよ。

銀木犀の方が香りも薄いし、明るいオレンジ色の金木犀の花に比べると、白い銀木犀の花はどうしてもさらに地味なイメージです。でもだからこそ、ご主人となられる方に贈りたい、とわざわざご注文いただいてくださいますね。

結婚式が終わってから贈って吃驚させたい、ということでしたので新八様とも相談して、こちらに直接お持ちした次第です。どうぞ、お受け取りください」

屁怒組がいかつい顔をくしゃくしゃにして、嬉しそうに笑いながら、銀時に鉢植を差し出す。

「…そうなんだ」

屁怒組の突然の訪問にも度肝を抜かれたが、この贈り物にも驚かされたのは確かだ。

「銀木犀なんて花があることも知らなかったなア。」

でも、白い喇叭みてエな小さい花がめいっぱい咲いていて可愛いじゃねエか。…嬉しいねエ」

屁怒組が笑顔をちよつと真顔に戻して、銀時に言う。

「銀木犀の花言葉、ご存知ですか？」

「いや、知らねエな。なにしろ花の存在も今、知ったようなものだから」

「じゃあ、特別にお教えいたしましょうか。」

金木犀は『謙遜』や『真実』といったいくつかの言葉があるので、銀木犀はたったひとつだけなんです。銀木犀の花言葉は『初恋』です。

銀木犀をご主人にどうしても贈りたい、という奥様の気持ち、これでおわかりかと……」

「ああ、ああ、もういいからア！もういいってエ！」

屁怒組の冷やかすような顔に気づいて、銀時は思わず顔を赤らめながらその言葉をさえぎった。鉢植を乱暴に受取り、屁怒組の肩をぐいと押しながら、口の端でニツと笑う。

「……ありがとよ、花屋さん」

「どういたしまして。まいどごひいきに……」

深々とお辞儀をして屁怒組がホテルの廊下をゆっくり立ち去っていく。その姿を見送ると、鉢植をそっと抱えなおし、銀時はベッドのある部屋に戻り、彼女に声をかけた。

「銀木犀、たしかに受け取った……！！……？」

ベッドの上では彼女が気持ちよさそうに寝息をたてている。昨晩はほぼ徹夜で準備をしていたから無理もないことだ。

「……って、おいッ！おいおいッ！寝るなッて！おいッ！」

銀時にゆさぶられても、彼女は目を覚ます気配はない。それどころかむにゅむにゅと何かを呟きながら幸せそうに寝息をたてている。彼女を起こすのをあきらめた銀時は、眠りこけている彼女の体を横抱きにすると、そっとベッドの枕にその頭をのせてやる。そしてその隣に添い寝をしながら、サイドテーブルに置いた銀木犀の鉢を見た。

「……初恋かア。言うねエ……」

そう言いながら、眠っている彼女の頬にそっとキスをする。

「……ってか、これでも目を覚まさねエってどういうことオ？今夜、俺、どうすればいいわけエ？」

ぶちぶちと愚痴りながら、彼女の髪の毛をゆっくり撫でる銀時。すうすうと寝息をたてる彼女のうなじから腕を差し入れ、腕枕をしながら彼女にもう一度、やさしくキス。

「…まアいいかア。こうやって寝顔をこんな近くで見るのはじめてだし」

…愛してる。

そう呟きながら、彼女の体に自分の体を寄せる。あたたく幸せな時間。閉じた瞼の長いまつげや、きゅっと結ばれたさくらんぼのような唇にちよいちよいとちょっかいを出しながら、やさしくキスをする。

部屋の中は、やさしい銀木犀の香りで満ちている。

彼女が目を覚ますまで、あともう少し…

おしまい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2420m/>

銀木犀を君に...～銀時、結婚式の夜～

2010年10月20日19時58分発行